

害を矯正せんために試みたる禁獄、國史の纂修、池溝開墾、工藝繪畫の奨勵、音樂の學習等に就て述ぶるところなり、尙附録として聖徳太子憲法略解一篇を新たに加へたり。太子の十七條憲法に關しては昨年岡田正之氏、黑板博士相踵いで其研究を發表せられしが、本書十七條憲法の章には此等の新研究に就いては言及するところなしと雖も、附録に於ては岡田氏の所説をも參酌考慮して筆を行れり。尙ほ其他の章節中にも小補正をなしたる所あり、引用の漢文の字句に讀み易き様送り假名を施せる等と改正せられたるものにして、要するに本書は因より全く前版の面目を更めたるものにはあらざれども著者が多年其の崇拜する聖徳太子を傳するため常に工夫を怠らざるを見るべし(丙午出版社、價一〇〇)〔西田〕

◎賀茂眞淵と本居宣長 文學博士 佐々木信綱著

本書は著者が最近二三年間に濱松、名古屋、松坂等の各地に資料を探りし結果として成れる眞淵、宣長兩翁の傳記學問に關する論文小品二十篇を集めたるものなり。前者に關しては縣居の九月十三夜、眞淵の遷都論、眞淵の土藩に贈りし書牘、豊尾と眞淵、眞淵と景樹、縣居集音錄の一節、眞淵と元厩校本萬葉、眞淵と三十一言の歌、ふくろの抄及び眞淵の遺墨の十篇あり、後者に關しては松坂の一夜、宣長傳補遺、宣長の母勝子、松坂雜記、古事記

傳の版木、宣長と萬葉研究、宣長の五言七言論、排蘆小船、宣長の歌論、磯弁問答解説及び和泉和麿の宣長評の十篇あり。これら諸篇の中縣居の九月十三夜及び松坂の一夜の二篇は他の諸論文と稍々其趣を異にし、多く想像を交へて歴史小説の體となし、吾人をして寧ろ無くもがな之感を起さしむ。その他諸篇は長短一ならずれども、何れも趣味と價值とに富める文字なり。殊に蒙庵と眞淵及び宣長傳補遺中の宣長の神道歌論に關する思想の淵源の如きは學問の傳統を考ふる上に參考となるものなるべし。ふくろの抄は眞淵が四人の女弟子に宛てたる書翰集「ふくろ」の抄録にして、眞淵の人物を窺ふべき好資料たり。又排蘆小船は宣長の著にして學界未知のもの、石上私淑言の初稿本なりと著者は断定せられたり。要するに本書は文章平明振假名附にして通俗を旨としたれども、その記事斯道の研究者を裨益すること多大なるべし。卷頭には關係の寫眞版八葉を挿入せり。(東京市京橋區南橫町十八番地廣文堂發行價〇、九〇)〔古田〕

◎松平不昧傳 三冊 松平家編輯部編纂

出雲松江藩に於ける近世の名主として、又茶道不昧流の開祖として名高き松平泮郷公の傳記にして舊藩主松平直亮伯の意を承け高橋龍雄氏主としてこれを編纂し文學博士三浦周行氏の校閲を経たるものなり。本書上卷は卷頭雲州松平家國主略表、松平不昧略

年譜を掲げ、第壹篇以下に於てはその幼時、父天隆院宗行公の事蹟より元服、裝束並びに活世間に於ける人才登用、國內巡視、治水工事、殖産工藝の奨励等を叙し、中巻には皇室との關係を記してその祖母天岳夫人の伏見宮邦永親王の王女なりしことより其の家庭已に尊王の氣風他と異なるものありとし、公が朝廷の爲めに益すところ少からざりしを叙し、武術の奨励を叙して茶道に及びその傳統茶書の蒐集研究、不昧流の創立並に退隱後茶般一味の眞天地を樂みたる大崎名園、孤蓬庵、茶友錄著述等の事に亘りて詳述するところあり下巻は美術の保護と公の禪學佛學書道等廣く教養の方面と其逸事を記し、卷末不昧公百年忌記念大茶會記を附收せり其資料は主として松平家所藏のものに取りたれども尙多方面の蒐集にもつとめて正確を期し、挿畫には肖像筆蹟及び不昧好み茶器の類を多く收め、印刷裝幀共に高雅にして不昧公傳記として遺憾なきものなるべし(非賣品)(西田)

●尾參遠郷土史論

日本歴史地理學會編

昨夏三河國豊橋市に開催せられたる日本歴史地理學會夏期講演會の講演筆記を修訂し、之に同時の名古屋市に於ける講演の概要を合せて編纂せるものにて、體裁はすべて同會が從來出版せる時代史論等と同じ。本文六四〇頁ありて、收むる所、上古史(文學博士喜田貞吉氏)、奈良平安朝史(文學博士吉田東伍氏)、鎌倉及び南

北朝史(文學士大森金五郎氏)、室町時代及び戰國時代史(文學士渡邊世祐氏)、徳川時代史(文學博士辻善之助氏)、幕末維新史(文學士岡部精一氏)、尾州の産業發達(文學博士吉田東伍氏)、明治維新と尾張藩(文學士岡部精一氏)、尾參遠地方の史蹟研究に就いて(文學士堀田璋左右氏)、東海道中(文學士藤井甚太郎氏)の十編、何れも平易に我が國各時代の歴史を叙し、當時の尾參遠を説明せんと試みたるものなるが、時代史の内には單に一般史の記述に止り、殆んど尾參遠と交渉なければ、稍表題と相添はざる憾あるも見ゆ。郷土史論として最も注意すべきは「奈良平安朝史」と「室町時代及び戰國時代史」にして、前者は氏族、姓氏より初めて郡郷の制度、人口、田制、神社、寺院、産業等種々の方面より當時の尾參遠を觀察し、後者は此の地より起れる英傑が我が歴史上に活動せる迹を記述せるものにて、經濟史上より縱横に論述したる「尾州の産業發達」と共に併せ讀むべきものなり。其他に於ては「上古史」は古代史に關する新研究を平易に述べ、「徳川時代史」は其の後半に種々の方面より平民勢力の發展を論じたり。東海道中は大名の道中、朝鮮信使の見たる道中、外人の見たる道中等種々の方面よりその有様を平易に説明したり、又卷頭に其の地方に關する數葉の史蹟寫真版を載せたるは興深けれども、たゞ本文中隨所に地理を論じ郷土を説けるにか、はらず、之に對照すべき地圖を